

2016/10/24P4C 研究会記録

2015/2/4 神戸大学附属中等教育学校「人生で一番大切なものは何か」について議論

出席者 小学校教師 4 名、中学校教師 2 名、高校教師 2 名、大学教師 2 名、社会人 1 名。
合計 11 名。

p4c.japan の Web に投稿してある上記授業記録を読んで、皆で講評する。

- 最初に D が発言。D は目立ちたがり屋である。
- D の発言を受けて、E が発言し、それによって、議論の雰囲気が変わる状況が見える。
- この後、J が「大切なものは友だち」という発言をしている。
- F は D を意識して発言している。D の発言は Safety を作り上げていく調整として働いている。

●4 年間にじめの対象となっていた子がいる。例えば、その子がプリントを配ると配られた子はそのプリントを拭くというような態度を取った。いじめアンケートを取ると、クラスの半数がその子に同様な態度を取っていた。教師の前ではしていない。このような状況の中で、2 学期にはかなりの頻度で P4C を取り入れて授業をすると、その子は目立つ仕方じゃべるといふことが無くなり、いじめの感覚も無くなっていった。普通の子になりつつある。友だちがいなかったのが、仲間に入れられるようになった。P4C はいじめを無くす効果があった。他の子も自分たちにもおかしいところがあるという新しい発見をしている。P4C の授業の後、今日は楽しかったという雰囲気が生まれている。

- D はどうなっていったのか。
- 変な奴という烙印を押されていたが、P4C の中で大活躍するようになり、発言する過程で、納得すると自分の発言を変えて意見を言うようになった。周りから認められ始め、いわゆる成績も少し上がってきている。

- この授業では、生徒 D が議論を導いていた印象がある。
金⇒金以前、目的は何か⇒友だち⇒ネガティブ・ポジティブ⇒考え方を変えることが大事

- このような授業の展開だと、今どういうことが起こっているかの解説をしたくなるが、実際この授業ではあまり介入していないが、そこには何か考えがあるのか。

- 担任としては、状況が分っているので、介入すると D だけに注目が集まるということになってしまう。

- すぐに介入するのではなく、後で、このことに触れる。

- その場での解説になるとわざとらしい感じになる。
 - 子どもが言うまで待つという感覚。隙間の時間が大切。これは担任だからできる。
 - 授業中にどこがよかったかということが研究授業などでは問題になってくるが、むしろ、授業の合間に解説あるいは評価をしてあげる方が授業がうまく行く。
 - 反省の時間を作る。
 - 今日の時間はどうだった？今日は何について考えたのかな？という問いを出す過程で、Dはすごく活躍したねというようなコメントを与える。
-
- 板書して、発言内容をカテゴライズするという方法は取れないか。
 - 考えの転換が起きたということの指摘はできないか。
 - つまり、発言内容や論理の可視化ということはできないか。
 - このような形で、スキルを養う授業をしてもいいのではないか。
-
- 教師は導いてやらなければならないという思いがあるが、子どもはそれを超えていることがある。
 - ふり返りで評価を返してあげる。
 - 自然にできていることを分析し、意識化できるといいと思う。
-
- 反復していけば、能力が身についていく。
-
- 評価の維持をどうするか。
 - 介入して、スキルを使うことで、子どもが語れるようになるという面もある。
-
- 今「皆」という言葉が使われたけど、それを言い換えるとどうなるかな。「皆」の内容はどういうことかな。
 - 笑顔の有難うを返そう。
 - 授業によって、子どもが何か一つでも持ち帰ることができるものを工夫する。
 - 抽象的な考えに向いていない子には、別の授業や特活などで、持ち帰ることのできるものを振り返る。
-
- Dの発言の後に、教師が介入している場面が多いという印象を持つ。
 - 気になる子に教師の意識がいつている。
-
- 普通教師の場合、自分のことは話さない。ここでは教師が自分を語っている。ごによごによ言っているが、子どもに誠実に対応しているということが分る。このような態度が子どもに安心を与えている。⇒共に考えるという態度。

- D のために授業をしているということから、次第に D から離れていっている。
 - 改めて記録を見てみると、D が考えを変えていくのが面白い。
 - 子どもたちがここまで考えているのか、ということがまとめて見ることによって分ってくる。
-
- 議論の内容を追っているというよりも、子どもを見ている。
-
- 教師が楽しんでいるということが見透かされている。
 - 先生も楽しんでいるというようになってくると、授業が変わる。
 - 子どもがやらされ感があると授業は盛り上がらない。先生が楽しんでいることが分っていると、また次に結びついていく。子どもたちに自己肯定感を与えているのではないか。
-
- 問いをアンケート形式で出してもらった時、問いを出させて議論しようとする、今までテストで出されてきたような問いしか出さない状況がある。
 - 問いを出してもらうにもスキルがいる。
 - 先生が話したいと思っている問いを子どもが選ぶような状況から、今は先生の話したいという問いに対して反発してきて、自分たちの問いを作ろうとしている。
-
- 商店街での対話では、人の発言で自分が揺れるとか、スキルを隠すということが起こる。対立している人の場合、相手に反応したくてもなかなか反応できない。例えば、「若い奴が何を言っている」という発言への対応が難しい。